В КРУГЕ ПЕРВОМ
by Александр И. Солженицын
Copyright © 1968 by Harper & Row Inc.
Japanese translation rights arranged
through Japan Uni Agency Inc., Tokyo.

© 1978 Shueisha

集英社版世界の文学32
ソルジェニーツィン
一九七八年七月二〇日印刷
一九七八年八月二〇日発行
訳　者　木村浩／松永緑彌
編　集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています
0397-122032-3041

目次

煉獄のなかで　木村浩・松永緑彌訳　3

解説　木村浩　643

著作年表　652

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

煉獄のなかで

1　どなたさまでしょうか？

網目模様の時計の針が四時五分をさしていた。

消えかけている十二月のほのぐらい昼の光の中で、この棚の時計の青銅はすっかり黒ずんで見えた。

床からじかにはじまる高窓の素通しの二重ガラス越しに、通りのあわただしい往来と、落ちたばかりだというのにもうべたべたしている褐色の汚ならしい雪を、歩行者の足もとから掻き捨てている小使たちの姿が下に見えた。

こんな光景を眺めるともなく眺めながら、二等参事官イノノケンチイ・ヴォロジンは窓枠のへりにもたれて、何かかぼそく長い曲を口笛で吹いていた。彼の指先は色彩あざやかな外国雑誌のなめらかなページをめくっていたが、中を見ているわけではなかった。

外交官勤務では中佐に相当する二等参事官だったが、背が高くほっそりしている上に、制服ではなく生地のいい背広を着ていたので、インノケンチイ・ヴォロジンは外務省の要職にある役人というよりも、むしろ金持の若い遊び人といったふうに見えた。

もう部屋に灯をつけるか（だが彼はつけなかった）帰宅するかする時間だったが、彼はその場をじっと動かなかった。

午後四時という時刻は勤務時間のおわりではなく、その昼の部の、つまり、あまり重要でないほうのおわりを意味していた。この時刻がくると、みんなは食事と一寝入りしに帰宅するが、午後十時からふたたび四十五の連邦省と二十の共和国省の幾千の窓という窓には灯がともるのだった。幾重もの城壁の奥にいるたったひとりの人間が夜眠れないのだ。そして他ならぬその人間が、モスクワの全官僚を午前三時四時まで自分といっしょにおきているように慣らしてしまったのだ。主君のこの夜ふかし癖を知っているので、六十何人かの大臣は小学生よろしくお呼びを待っておきている。彼らは眠気にさそわれないよう次官たちを呼びだし、次官たちは課長たちをいじめ、調査課員は段ばしごにのぼってカード目録をさがし、事務官は廊下をはしり、速記者は鉛筆の芯を折っているのだった。

だから今日も、西側ではクリスマス・イヴだというのに（どこの大公使館ももう二日前から死んだようにしずまりかえっていて、電話一本かかってこない。今頃はおそらく館員たちはクリスマス・ツリーを囲んでいるにちがいない）彼らの役所では相変わらず夜勤がおこなわれていた。チェスをさす者、小話をする者、ソファで居眠りする者、各人各様だが――しかし仕事はあるのだ……

ヴォロジンの神経質そうな指は、雑誌のページをぱらぱらあてどなくめくっていた。しかし、胸の中では時どき不安にかられ、それはいくぶんはげしくなるかと思うとまたしずまったが、そのたびに彼は背筋にひんやりしたものを覚えるのだった。

ドブロウーモフ博士のことならヴォロジンは子供のころからとてもよく憶えていた。当時博士はまだ今のような大物ではなく、使節団の一員として外国へ派遣されるようなこともなく、たしか学者とは呼ばれず単に医者といわれていただけで、気やすく往診をひきうけてくれたりしていた。母はよく病気になったが、そのたびに呼びたがるのはこの人だった。母は彼を信頼していたのだ。彼がやってきて、玄関であざらし皮の帽子をぬぐと、たちまち家の者は落ちついて、これでもう安心だといった気分が家中にひろがるのだった。彼は病人の枕元を三十分足らずで立ち去るようなことはなかった。彼はかならずいちいち病人の訴えを丁寧にきき、それからさも満足気に診察し、療法をこまごまと説明してきかせるのだった。彼はそれから帰ろうとして少年だったヴォロジンのそばを通ったが、いつもかならず質問をひとつ浴びせた。そして立ちどまって、何か賢明なことを聞こうと大まじめに期待しているかのように少年の答えを最後まで聞くのだった。博士の髪はもうあのころから白くなりかかっていたが、今はどうなっているのだろう？……

ヴォロジンは雑誌をほうりだし、肩をすぼめて部屋の中を歩きだした。

電話をかけようか、やめようか？

もしこれが自分の知らないだれかほかの医学部教授に関することだったら、ヴォロジンはおそらく、知らせなければならないなどとは考えなかったにちがいない。だが、ほかならないドブロウーモフではないか？

いったい公衆電話でだれが話したかつきとめる手段などあるだろうか？　ぐずぐず長話せずに、さっさと立ち去ってしまうならば。いったい押しつぶれたような電話の声から、その声の主がわかるものだろうか？　そんな技術はありようはずがない。

彼はデスクに近寄った。薄暮の光で彼は自分の新しい任地に関する訓令のいちばん上の紙片を文字も読まずに見分けた。彼は新年を待たずに、水曜か木曜に出発しなければならないのだ。

成りゆきを待つほうが道理にかなっている。成りゆきを待つほうが賢明だ。

えい、畜生！　重荷に不慣れの彼の肩は悪寒にふるえた。知らなければよかったのだ。知らなければ知らないですんだのだ。

彼は訓令その他一切のものをデスクから片づけ、耐火金庫へ運んだ。

だが、いったい、ドブロウーモフが約束したことにどん

な非があるというのか？　それは才能の気前よさというものだ。才能はいつも自分が豊かであることを知っており、人に分け与えることを惜しまないものだ。

しかし、不安はいよいよつのっていった。ヴォロジンは耐火金庫にもたれ、頭をおとし、目を閉じたままじっとしていた。

それから突然、最後の瞬間をとりにがそうとしている人のように、車庫へ車を呼ぶ電話もかけず、インキ壺の蓋もしないで、ヴォロジンはドアを閉め、廊下のはずれで鍵を当直員にわたすと、オーバーを着こみ、金の縫いとりや金モールのついた制服をきた仲間たちをつぎつぎに追いこしながら、階段をかけるようにしておりた。そして、しめっぽい、たそがれゆく外へとびだした。

フランス製の靴が、汚ならしく融けかけた雪に、ずぶずぶもぐった。

半ば囲いこまれた省の中庭に立つヴォロフスキイ（ワツラフ・ワツラヴォヴィチ。一八七一～一九二三。ソ連の批評家・外交官。国立出版所長。ファシストに暗殺される）の記念像のそばを通りながら、ヴォロジンはふと目をあげ、びくっとした。フルカソフスキイ通りに面するボリシャヤ・ルビャンカのこの新しい建物に彼は新しい意味を感じとったのだ。この灰黒色をした九階建ての大きな図体の建物は戦艦さながらで、十八の壁柱は十八の砲塔のようにその右舷にそびえたっていた。そしてヴォロジンはたった一艘のちっぽけな丸木舟のように小さな広場を横ぎり、そちらへ、重装備を施した快速艦のへさきの下へぐいぐいひっぱられていくのだった。

彼はそれを避けようとするかのように右手へまがると、クズネツキイ・モスト通りを歩きだした。歩道すれすれにタクシーが一台出るばかりになってとまっていた。ヴォロジンはそのタクシーに乗り、クズネツキイ・モスト通りをくだらせ、それから左へ、街灯に灯のともったばかりのペトローフカ通りへまがるよう命じた。

彼はまだ迷っていた――硬貨のふちで外からこつこつガラスをたたかれないためには、どこのボックスから電話したものだろう？　だが、ぽつんとひとつだけ離れてたっている静かなボックスをさがせば、かえって人目についてしまう。いっそどこか人の渦まいているどまん中あたりのほうがよくはないだろうか。――ただボックスさえ声がもれないようになっていれば。それに、いたずらに車を乗りまわして運転手を目撃者にしてしまうのは愚劣きわまる、と彼は思った。彼はポケットをさぐり、十五コペイカ貨幣をさがした。

だがしかし、そんなことはどれもこれもみなもう大したことではなくなってきた。これまでにすぎさった数分の間にヴォロジンは突然気持が落ちついてしまったのだ。ほかにどう仕様もないことを彼ははっきりと感じたのだった。危なかろうと危なくなかろうと、とにかくやらなければ……

いつも何かを気にしていたら――われわれは人間でいられるだろうか？

オホートヌイ・リヤードの信号機の手前で、彼の指は一ぺんに二枚の十五コペイカ硬貨にさわり、ひっぱりだした――吉兆だ！

大学をすぎると、ヴォロジンは右へやれと頭で合図した。車はアルバート通りへむかって疾走した。ヴォロジンは釣銭はいらないといって紙幣を二枚わたし、歩度をゆるめるよう努めながら広場を歩きだした。

アルバート通りはもうすっかり灯の海であった。映画館の前には『バレリーナの恋』を見ようと幾列にもなってぎっしり人が並んでいた。地下鉄入口の『M』の赤い文字が、灰色がかったもやの中にかすんでいた。ジプシー風の女が黄色っぽいミモザの小枝を売っていた。

とにかく、できるかぎり敏速にやらなければならない。できるかぎり手短に話し、受話器をかけてしまうことだ。そうすれば危険は最小限ですむ。

ヴォロジンは真正面をむいて歩いていった。そんな彼を急ぎ足ですれちがった娘が目をあげてちらと見た。

それからもう一人。

駅の外にある木のボックスにあいているのが一つあったが、ヴォロジンはそれには目もくれないで駅の中へ入っていった。

そこでは壁をえぐってつくられたボックスが四つとも全部ふさがっていた。が、いちばん左手のボックスでは間の抜けた顔をした一杯機嫌の男が話をおえて、もう受話器をかけようとしているところだった。その男といれかわりにヴォロジンはすばやくなかへ入り、厚いガラスのはまったドアをぴっちり閉めると、片手でドアの把手をおさえながら、ふるえるもう一方の手で、なめし皮の手袋もとらずに硬貨を一枚おとし、ダイヤルをまわした。

長い呼出し音がいくつか鳴ったのち、相手の受話器がはずされた。

「はいはい」不承不承、もしくはいらだたしげときこえる女の声がきこえた。

「もしもし、そちらはドブロウーモフ教授のお宅でしょうか？」

（彼は声をつくろうと努めた）

「さようでございます」

「あいすみませんが、教授をお願いしたいのですが」

「どなたさまでしょうか？」その声はけだるそうだったから、婦人はおそらくソファにでも坐って、のんびりしていたにちがいない。

「実は……わたしはあなたの御存知ない者なのですが……いや、そんなことは大して重要なことではありません。これは是非ともお話ししなければならないことなのです。どうぞ教授をお呼びください！」

（よけいな言葉が多すぎるが、これもみなくそいまいまし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いエチケットとかいうやつのおかげだ！）
「でも、教授は電話のかかるたびに、どこのどなたかわからないようなお方とお話しするわけにはまいりませんわ」婦人は腹立たしげな声でいった。
その口調は、今にもがちゃりと受話器をおきかねない勢いだった。
厚いガラスのむこうのボックスの列のすぐさきを、人々が越しつ越されつしながらとぶように急いでいた。ヴォロジンのボックスの前にもう人がひとり立って順番を待っていた。
「いったいあなたはどなたさまでいらっしゃいますか？　どうしてお名前をおっしゃれないのですか？」
「わたしはあなた方の味方です！　わたしは教授にとって重要な情報をにぎっているのです！」
「それで？　どうしてあなたはお名乗りになるのを恐れていらっしゃるのです？」
（もう電話を切らねばならない時間であった。物わかりのわるい妻をもつものじゃない！）
「あなたはどなたです？　教授の奥様ですか？」
「なんであたくしのほうから先にお答えしなければならないのですか？」婦人は声をはりあげた。「あなたのほうから先におっしゃってくださいまし！」
すぐにも彼は電話を切りたいところだった。しかし、ことは教授ひとりだけに関する問題ではなかったのだ……頭がかっかしてきて、もう声をつくったり平静に話したりする余裕もなくなり、ヴォロジンは上ずった声で電話の相手を説得しはじめた。
「もしもし！　もしもし！　わたしは教授の身に危険の迫っていることをお知らせしなければならないのです！」
「危険が迫っている、ですって？」婦人の声は急に低くなり、途切れた。だが、それでも彼女は夫を呼びにはいかなかった。「それならなおさら夫を呼ぶわけにはまいりませんわ！　それに、そんなこと嘘かもわかりませんでしょう？　あなたがおっしゃろうとしていることが本当だということを、あなたはどうして証明できまして？」
ヴォロジンには、自分の足の下でボックスの床が燃え、重い鉄の鎖をぶらさげた黒い受話器が、手の中で熔けるかに思われた。
「もしもし、もしもし！」もう捨てばちになって彼は叫んだ。
「教授はパリに派遣されていたとき、同僚のフランス人教授たちにある品物を渡すと約束なさったのです！　そう、ある薬品です。しかも数日中に渡すことになっているのです！　外国人にですよ！　おわかりですか？　これは絶対にしてはならないことなのです！　外国人になど、何一つ渡してはいけないのです！　もしかするともうこのことをめぐって始まっているかもしれないのですよ、一連の策……」

しかし――受話器にかちっと鈍い音がして、それきりもう何の音もきこえなくなった。
だれかが線を切ってしまったのだった。

2　ダンテの着想

「新入りさんたちだ！」
「新入りさんたちの御入来だ！」
「どちらからです、同志諸君？」
「諸君、どちらからです？」
「そりゃあいったい何です、諸君の胸だの帽子だのについているのは？　しみか何かですか？」
「ここにはわれわれの番号がついていたんですよ。このとおり背中にも、膝にも。収容所から送りだされるとき剝ぎとられたんです」
「番号って、そりゃあいったい何のことですか」
「みなさん、いったいぜんたいわれわれは何世紀に生きているというのでしょう？　人間に番号をつけるとは？　レフ・グリゴーリチ、教えてくださいよ――これがいわゆる、進歩的っていうやつなんですか？」
「ワレントゥーリャ、ぶつのはやめにして夕食をしてきたほうがいいですよ」
「いや、夕食をとるどこじゃありませんよ、どこかで人間が額に番号をつけて歩いてるときいては！」
「黙示録ですな！　ヨハネ黙示録ですよ！」
「諸君！　十二月後半の分として『ベロモル』（タバコの名前）が九箱あて出るぞ。諸君は運がいいよ」
「ベロモルの『ヤヴァ』ですか、それともベロモルの『ドゥカット』ですか？」
「半々だよ」
「けしからん、『ドゥカット』でわれわれの息をつまらせようって寸法だな。こいつは是が非でも大臣に訴えてやるからな」
「みなさんの着ているその作業服は何です？　どうしてこのみなさんはみんなパラシュート兵みたいな恰好をしているんです？」
「制服をきめやがったんですよ。やつらのしめつけなんです。以前はウールの背広だの、厚ラシャの外套なんぞ支給してたんですがね」
「やあ、新入りさんたちだぞ！」
「新入りさんたちの御入来だ」
「おやおや！　なんだ、諸君は生きた囚人を見たことがないみたいじゃないか？　廊下がすっかりいっぱいになっちまったぞ！」
「こりゃおどろいた！　だれかと思ったら、ドフ＝ドニエプロフスキイじゃありませんか?!　いったいあなたはどこにいらっしゃったんです、ドフ？　わたしは四五年にそれこそウィーンじゅうあなたを探してまわったんですよ！」

「ぼろ服を着て、ひげものび放題で！　どこの収容所からです、諸君？」
「あちこちからですよ。『川』・収容所から……」
「……『かしの森』・収容所から……」
「わたしはここに入れられて九年目だが、そんな名前はきいたことがありませんな……」
「これは新しくできた収容所なんです。『特別収容所』というやつですよ。昨年、つまり四八年に、はじめてできたんです。後方強化に関するスターリンのそういう指令がありましてね……」
「どこの後方の話です?!」
「ウィーンのプラーテル公園のちょうど入口のところで挙げられて、そのまま護送車にぽいですよ」
「ちょっと待ちたまえ、ミーチェンカ、新入りさんたちの話をきこうじゃないか……」
「それより散歩だ、散歩だ！　新鮮な空気を吸わなくちゃあ！　日課だもの、たとえ地震の最中でもな！　新入りさんたちへの質問はレフが全部やってくれるから、心配無用だ」
「第二組！　夕食！」
「『みずうみ』・収容所、『草原』・収容所、『曠原』・収容所、『砂原』・収容所……」
「どうも内務省にはプーシキン級の世に認められざる大詩人がいて、長詩を目ざすでもなく小詩を志すでもなく、もっぱら収容所に詩的な名前をつけるのが専門らしいな」
「あっはっはあ！　滑稽じゃありませんか、諸君、滑稽じゃありませんか！　われわれは何世紀に生きているというんです?」
「しいっ、静かに、ワレントゥーリャ！」
「失礼ですがあなたのお名前は?」
「レフ・グリゴーリチです」
「あなたもやはり技術者ですか?」
「いいえ、わたしは技術者じゃありませんよ。わたしは言語学のほうです」
「言語学?　ここは言語学者まで収容するのですか?」
「ここに収容されてないのはどんな人間か、とたずねられたほうがいいですよ！　ここには数学者、物理学者、化学者、無線技術者、電話関係の技術者、画家、翻訳者、製本技術者、建築家、設計家、いや、ひとり地質学者までまちがっておくりこまれてきましてね」
「で、その人は今どうしています?」
「まあまあですよ。写真の現像所に腰を落ち着けましたからね」
「レフ！　君は唯物主義者だと自称しながら、やたらと精神的食物を人に食わせすぎるよ。傾聴、諸君！　食堂につれていかれたらね、あそこのいちばん端の窓ぎわのテーブルにわれわれは諸君のため三十枚ほど皿を並べておいたからね。腹いっぱいつめこんでくれ、はじけない程度にね！」

「どうもありがとう。でもあなたがたはどうして棄権されるんです？」
「なあにかまわないのさ。きょう日だれがメゼニ産の塩にしんだの、きびの粥なんかを食うものかね！　いやしいよ！」
「なんですって？　いやしいですって？　きびの粥がいやしい？　わたしなぞ五年もきびの粥にはお目にかかっていませんよ！」
「多分きびの粥じゃなく、雑炊がでるかもしれないぞ！」
「とんでもないことだ――雑炊だなんて！　雑炊なんかだしてみるがいい！　やつらの面にぶっかけてくれるから！」
「ところでこのごろは通過収容所じゃどんなものを食わせるんです？」
「チェリャビンスク通過収容所では……」
「新チェリャビンスク収容所の話ですか、それとも旧チェリャビンスク収容所の話ですか？」
「そんな質問をされるところをみると、あなたはその辺の事情に通じた方ですね。新のほうですよ」
「あそこじゃどうです、相変わらず水洗便所は使わせないようにして、囚人たちは便桶に用をたして三階からはこびおろすんですか？」
「そのとおりですよ」
「あなたはいま特殊収容所とおっしゃいましたね。何です、その特殊収容所というのは？」
「ところでここじゃいくらパンがでます？……」
「まだ夕食をしてない者はいないか？　第二組！」
「白パンは四百グラムあて、黒パンはテーブルにでてます」
「失礼ですが、テーブルにでているってどういうことです？」
「文字どおりテーブルにでてるんですよ、切ってね。食べたければとるがいいし、食べたくなければとらないがいい」
「なるほど。でもそのバターとその『ベロモル』のため、われわれは一日十二時間とか十四時間とか、腰をかがめてせっせか働かなくちゃなりませんね」
「腰をかがめることはありませんよ！　机に坐っているなら、腰なんかかがめることはないんじゃありませんか！　腰をかがめるのはつるはしをふるう連中です」
「いやまったく、ここにいるとちょうど沼の中にいるようなもので、すっかり世の中と縁が切れてしまう。みなさん、おききになりましたか？――泥棒やすり連中は窮地に追いこまれているそうだし、ずぼらなほうだったクラスナヤ・プレスニャ刑務所でさえ、もうのんべんだらりとはしていないそうですよ」
「バターは教授に四十グラムあて、技術者に二十グラムあてです。能力に応じてとり、可能性に応じてあたえる、ってわけですよ」
「ではあなたはドニエプル・ダムで働いていらっしゃった

のですね？」
「ええ、ヴィンテル（アレクサンドル・ワシリエヴィチ。一八七八～一九五八。ソ連の工学者。ドニエプル水力発電所開設）のもとで働いていました。わたしはそのドニエプル水力発電所のおかげでここに入れられてるんですよ」
「といいますと？」
「つまりですね、あれをドイツ軍に売ったんですよ」
「ドニエプル水力発電所をですか？　だってあれは爆破されたんですよ！」
「それがどうかしましたか？　わたしはね、その爆破されたやつをやつらに売ったんです」
「いやまったく新風が吹きこんだみたいだ！　通過収容所！　護送車（ストライピン）！　収容所！　移動！　さっそくにもソビエツカヤ・ガヴァニ（沿海州の港市、近くに収容所がある）までいってきたいくらいだ！」
「かえりを忘れちゃいかんぜ、ワレントゥーリャ、かえりを忘れちゃ！」
「そうだともさ！　もちろん、早々にかえってこなくちゃ！」
「ねえ、レフ・グリゴーリチ、こうもいろいろな印象が一時に殺到したり、こうも急激に事情がかわったりしては目がまわってしまいますよ。わたしは五十二年間生きてきて、命にかかわるような病気からも幾度か恢復（かいふく）したし、美しい女たちとも結婚したし、息子も何人か生まれたし、学術奨励金ももらいましたがね、今日ほど幸福だと思ったことは一度もありませんでしたよ！　わたしはどこへきたんでしょう？　明日は氷のようにつめたい水の中へ追いやられることもない！　バターは四十グラムももらえる！　黒パンはテーブルにでていて食べ放題！　本も禁止されていない！　自分でひげもそれる！　看守は囚人をなぐったりしない！　なんてすばらしい日でしょう！　光り輝く山頂にでものぼったみたいです！　ことによるとわたしは死んだのじゃないでしょうか？　これは夢なんじゃないでしょうか？　わたしは天国にでもいるような気がしますよ！」
「それはちがいますよ。あなたは相変わらず地獄にいるのです。ただしそこの最上層、つまり第一圏（シャラーシカ）*にのぼったわけなのですよ。特殊収容所（シャラーシカ）とは何だってあなたはおたずねですね？　これを思いついたのは、そう、ダンテです。憶えておいででしょうが、ダンテは古代の賢者たちをどこへ入れたものかと頭を悩ましました。キリスト教徒たる者の義務はこれらの異教徒たちを地獄へ投げこむよう命じていました。しかしルネッサンスの良心は、これら明智の人たちを他の罪人たちといっしょくたにして肉体的責め苦を負わ

* ダンテ『神曲』の中の地獄の第一圏の意。第四歌に歌われている。カソリックでいう Limbo（辺獄）、つまり地獄自体というよりその縁辺あるいはその最上級層のこと。キリスト以前に生まれた心正しき者、洗礼前に死んだ幼児などはここにはいるという。『神曲』ではホメロス、ホラチウス、ヴィルジル、オウィディウス、ルキアノス等がいることになっている。この作品では特殊収容所を比喩的にそう呼んだ。

せるにはしのびなかったのです。そこでダンテは、そういう人たちのため地獄に特別の場所を考えだしました。ええっと……神曲の第四歌にはざっとこんなふうに書かれています――

『高い城がわたしの前にたちあらわれ……』

見てごらんなさい、ここの古風な丸天井を！

『……うつくしい城壁を七重にめぐらし……

七つの門をくぐって道は中へと通じていた……』

あなたは囚人護送車で入ってこられたから、それで門が見えなかったのですよ。

『そこには重々しい額と、

おだやかな眼差しをもった人々がおり……

その顔立ちはたのしげでもきびしくもなかった……

わたしは尊い方々が大勢そこに隠遁しているのだとわかった……

教えてくれ、まわりをとりまく大勢の人の中にあって、

他に比類ない立派なあの方々は誰々なのか？……』」

「やれやれ、レフ・グリゴーリエヴィチ、あなたはあまりにも詩人すぎますよ。わたしがこの同志に特殊収容所の何たるかをもっとずっとわかりやすく説明してさしあげますよ。それにはたとえばこういった類の新聞の論説を読んでいただかなくてはね。いいですか――『羊毛の高い生産高は羊の栄養と世話いかんによることが立証された』といったような」

3　プロテスタントのクリスマス

クリスマス・ツリーは、腰掛の板の隙間につっこんだ松の小枝だった。色とりどりの豆ランプをつけた電線がツリーを二巻きし、乳白色の塩化ビニール被覆の導線に接続されて床の電池までおりていた。

腰掛は部屋の一隅の二段ベッドと二段ベッドの間の通路におかれ、上段のマットレスの一つが天井の電灯の輝きをさえぎって、隅全体とちっぽけなツリーを陰にしていた。

パラシュート兵の着るような藍色の丈夫な作業服を着た六人の男がツリーをかこんで立ち、その中のひとり、色の浅黒い細面のマックス・リヒトマンがプロテスタントのクリスマスの祈りを読むのを頭を傾けてきいていた。脚のところを鍛接した同様の二段ベッドのぎっしりならんでいるこの大きな部屋には、ほかにだれもいなかった。夕食と一時間の散歩をおえると、みな夜勤に出はらってしまったのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.